

何が教員志望を止めるのか

——大学生・高校生の進路選択意識調査を通じて——

杉原 敏彦 (広島大学)

教員の就労環境に関する報道, 特に勤務実態が過酷であるとの報道が目立つように思う。そのことと関係があるのか, 大学の教育学部に勤めていて, 近年, 教員志望の大学生が減少しているという実感がある。そこで, 高校生, 大学生を対象に教員志望の状況に関するアンケート調査を行った。その分析を通して, 何が教員志望を止めるのか, どうすればそのような状況を乗り越えることができるか検討していく上での材料を提供したいと思う。

キーワード: 高校生の進路選択, 大学生の進路選択, 教員志望, 教員採用試験

1 はじめに

国立大学(広島大学)のアドミッション部門で大学生の受け入れに十数年間携わってきた。併せて, 本学教育学部で教員志望者の教員採用試験受験を支援する用務にも就いて3年を経たところである。この3年を振り返ると, 教員を目指していた教育学部の学生でその後教員志望を逡巡する者が増えている印象がある。しかも, そのような進路選択の迷いを私のようなカウンセラーに相談したいと考える時期(学生の年次として)が早くなっているというのも実感である。

このように教員志望を逡巡し, 教員以外の進路選択をする学生が増加しているのは本学だけではなく, 全国的に見られる課題である。「教員志願 止まらぬ減少」「教職が敬遠されている」という趣旨の報道はメディアで度々目に触れることとなり高校生, 大学生に大きな影響を与えているように思われる。¹⁾

一方で, 高校生の大学(進路)選択に当たっては一定数の教育学部入学希望者(教員志望者)がいることに変わりはない。こうした教員志望の高校生, 大学生がどの段階でその教員志望がゆらぐのか, また, 持ちこたえて志望をつなぐとしたらそれはどのような要因によるものなのか。この度, 高校生, 大学生をそれぞれ対象としてアンケート調査を行った。その調査結果からこの問題を分析していきたい。

2 高校生調査

2.1 調査の概要

広島大学では, 「大学訪問」という高大接続事業を実施している。文字どおり, 高校生が本学を訪問し大学教員による講義を受講するものである。大学訪問を実施する高校の生徒は, 複数の学部の中から希望する学部を選択し, その学部の講義を受ける仕組みにして

いる。この事業に参加した高校のうち, 教育学部選択者の多い2校を抽出し, 次節で述べるアンケートを実施した。

アンケート実施方法は次のとおりである。

調査時期: 2023年2月

調査実施校: A高校(公立高校, 広島市所在)及びB高校(私立高校, 広島市所在)

回答者の学年: 1年生(両校の全回答者とも)

回答者の学科: 普通科(両校の全回答者とも)

回答者の人数: A高校73人(教育学部参加者のうちの回答者)及びB高校18人(教育学部参加者のうちの回答者)合計92人

調査実施方法: 両校の当該事業担当教諭を訪ねてアンケート用紙を渡し, 高校において実施, 回収してもらった。

2.2 調査内容

高校生それぞれの現在に至るまでの学校歴の中で, 節目と思われる各時期を示し, その時々の教員志望の志望度合を5段階評定にて評価してもらった。

まず, この調査において対象となる節目の時期とは, (1)小学校6年生 小学校終了直前, (2)中学校3年生 中学校終了直前, (3)高校3年生9月 大学入試受験直前²⁾とした。

次に, 教員志望の志望度合としては, 次のように定義した。「それぞれの時期に, あなたは将来の職業としてどのくらい教員になりたいと思っていましたか」と問うた上で, 評定として, 評定5:教員になりたいと, 強く思っていた, 評定4:教員になりたいと, 思っていた, 評定3:教員になりたいかどうか, どちらとも言えない, 評定2:教員になりたいと, あまり思っていなかった, 評定1:教員になりたいと, 強く思っ

ていなかった、とした。

その上で、「上記のそれぞれの時期において、回答の評定が前の時期に比べて変化した主な理由は何ですか。次の選択肢から選んでください。当てはまるものがない場合は、自由に記述してください。また、追加質問に答えてください。」と指示した。回答は複数回答を可能とした。選択肢とは、

- (1) 教員の勤務環境等について、ブラックな風評が伝えられているため。＜追加質問＞ブラックな風評とは具体的にはどのようなことですか。
- (2) 教員として仕事をするうえで、学級経営など児童・生徒および保護者等との対応に不安を感じるため。
- ＜追加質問＞児童・生徒および保護者等との対応のなかでも特に誰との対応に不安を感じますか。
- (3) 教育実習、ボランティア活動、その他の活動等で児童・生徒と接する機会があったため。＜追加質問＞それはどのような活動の機会ですか。
- (4) 上記の他の理由。自由記述。

である。変化した理由として、予め上記(1)～(3)の理由を挙げたのは、これまで私自身が行ってきた進路相談ではこれらの理由を挙げる学生が多いという実態を踏まえた。

さらに、続いて、「回答の評定が前の時期に比べて下がった場合について尋ねます。それでは、どのような対応や支援等があったとしたら、そのように評定が下がることはなかった、と思いますか。自由に記述してください。」と尋ねた。³⁾

2.3 調査結果

2.3.1 評定

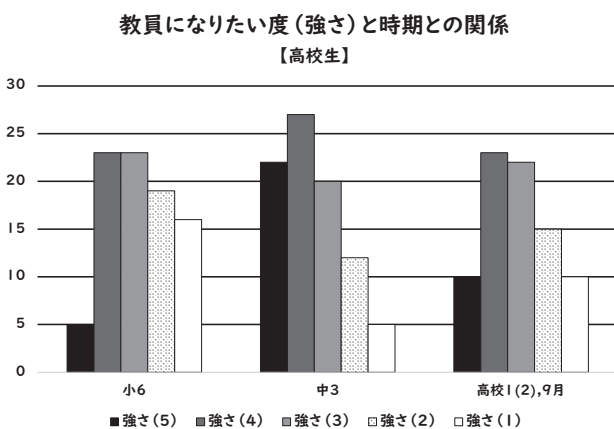


図1【高校生】「教員になりたい度」のアンケート回答結果 (5段階評定)

図1のとおり、小学校、中学校、高校の各時期の教員になりたいと思う強さ別の人数について、「強くなりたい」とする評定5の人数は、小学校の時最も少なく(5人)、中学校で最も多くなり(22人)、高校でまた少なくなっている(10人)。裏返しの関係で、「教員になりたいと強く思っていない」評定1の人数は、小学校の時最も多く(16人)、中学校で最も少なくなり(5人)、高校でまた増加している(10人)。

2.3.2 評定が変化した理由

次に、それぞれの時期において、回答の評定が前の時期に比べて変化した理由を見る。

高校での評定が1の者10人の中学校での評定は、それぞれ5が3人、4が1人、3が0人、2が1人、1が5人である。このうち、中学校時の評定が5又は4から1に下降した4人の変化した主な理由を見てみると、特徴的なのは全員が自由記述で回答していることである。4人中3人は「他の職業に魅力を感じたから」「学びたいと思う学問が他に見つかったから」などとしている。

中学校時の評定が高く高校時には評定が1に変化した上記の者も含めて、いずれにしても中学校時と比べ高校時に評定が下に変化した者を抽出すると、高校時評定4に下降した者6人(いずれも5から)、評定3に下降した者8人(5から2人、4から6人)、評定2に下降した者11人(5から1人、4から3人、3から7人)、評定1に下降した者5人(5から3人、4から1人、2から1人)である。合計30人の変化した主な理由を見ると、「(1)教員の勤務環境等について、ブラックな風評が伝えられているため」が12人、「(2)教員として仕事をするうえで、学級経営など児童・生徒および保護者との対応に不安を感じるため」が3人。「(4)上記以外の理由。」が15人であった。なお、上記以外の理由の主なものは、「他にやりたい学問、職業等が見つかったから」などである。

次に、このアンケートの中で回答者が自由に記述できる箇所の一つが「評定が変化した主な理由」であり、ここに注目した。(1)「教員の勤務環境等について、ブラックな風評が伝えられているため」を選択した上で記述している主な内容は次のとおりである。

- ・仕事量と給料が足りあっていない。
- ・拘束時間の長さ、仕事量
- ・残業に給料が出ない。母から聞いた。
- ・教員が減少している現状を知ったから。
- ・出勤時間が早く、退勤時間が遅い。また、人間関係が大変である。

- ・実務が多い。理想とは違うことが多い。
- ・ニュースで教員として働いていた人が追い込まれて自殺してしまったというのを聞いたことがあった。
- ・中学生になって、教師の理不尽さ、大変さ、それに対しての対価が少なすぎると知ったから。
- ・高校の先生方の忙しさに驚き、とても大変そうだと思ったから。

次に、(2)「教員として仕事をするうえで、学級経営など児童・生徒および保護者などとの対応に不安を感じるため」にかかわる自由記述は少なく、「具体的に誰との対応等に不安を感じるか」という追加の間に次のように答えている。

- ・保護者からのクレームが怖い。
- ・保護者
- ・いじめっことモンスターペアレンツ
- ・保護者・近隣住民
- ・不登校生徒の訪問。生徒・親からのクレーム等
- ・何度注意しても言うことが聞けない生徒

最後に、「どのような対応や支援等があったとしたら、そのように評価が下がることはなかった、と思いますか。」という質問も設定したが、これに対する記述としては、最も多かったのは、給料の上昇(16人)と勤務時間の削減(9人)である。主な記述は次のとおりである。

- ・残業代を出す。給料を上げる。
- ・時間外手当などの支援
- ・時間外労働に対する給料
- ・仕事量に見合った給料
- ・残業でボーナスを出す。
- ・残業時間の減少・給特法の改正
- ・定時で帰れる日をつくる。
- ・勤務時間を決める。
- ・十分な休暇
- ・働き方改革をもっとする。
- ・週に2、3回は定時に帰られるような仕事量であると確定したらよい。
- ・教員同士で助け合ったり、声をかけあったり、仕事詰めにならないように休暇を取りやすくする。

もう一つ多い意見としては、高校生に教員の仕事についてもっと知る機会があればよい、そのような機会を増やしてほしいというものがある(9人)。具体的な記述は次のとおりである。

- ・実際に、教員がどのような仕事、生活をしているのか知りたい。
- ・教育に関することを教わる機会
- ・教員になる前にもう少し子供と接したり教えたりす

る機会があればいいと思う。

- ・中学校3年次では、コロナ禍のため予定していた職業実習がなくなったため、一度経験する機会がほしい。
- ・学校外のイベントで、教員について学べる機会があればいいなと思いました。
- ・先生が、生徒の見えないところで何をしているのかを見せてくれたりすると、自分達の知らないことが見えてきて、もっと魅力を感じるができると思う。
- ・教員の楽しさを伝えてくれる人が近くにいたら、もっとよいイメージをもてていたかもしれない。
- ・実際の教師の様子について深く知りたかったので、教師の生活などについてもっと教えてほしかった。
- ・教員についての詳しい説明(仕事内容や働き方)

2.4 調査結果の分析

2.4.1 教員志望の度合の学校段階での推移

高校生を対象としたアンケート調査結果をみると、教員志望の度合いが変化、特に下方に変化する時期は中学生から高校生にかけての時期に当たる。教員志望の度合の最も高い者の人数は、小学校で少なく、中学校で増加し、高校でまた減少し落ち着く。これは、小学校段階では教員を職業として理解する力が未だ十分発達していないのに対して、中学校では小・中学校時代に理想とする教員と出会うなどの体験と相まって自分自身の職業選択の一つとして教員を捉えるようになるからと思われる。また、中学校から高校にかけての経験から、興味を持つ学問分野の広がりとともに意識する職業の幅が一挙に拡大し、相対的に教員志望の割合が減少するとみられる。

また、中学校から高校にかけての年代はインターネットの活用によって得られる情報の量も増大し、情報の質も社会性を帯びてくる。そうして情報の一つとして教員の就労環境の過酷さに関するものが目に留まるようになり、さらに家族等の人間関係の中でこのような情報に繰り返し接触するうち、高校生の教員志望の熱意が冷めていくのではないかと考える。

2.4.2 教員志望の度合の低下の要因

教員志望の度合の低下の要因として、一つは「教員の勤務環境等について、ブラックな風評が伝えられているため」、もう一つは「教員として仕事をするうえで、学級経営など児童・生徒および保護者などとの対応に不安を感じるため」という二つの仮説をもとに設問化した。高校生の回答結果は、前者が12人、後者が3人であった。これは、小学校から高校までの生徒の学校体験の中では児童・生徒・保護者対応に教員が苦慮

している様子を直接見聞する機会は比較的稀であるからではないか。それ以上に、教員の勤務状況に関する報道や家庭内の会話等に接する機会の方が遥かに多いからではないだろうか。

2.4.3 教員志望の度合の低下への対応策

学校段階が上がる中で評定の下がった回答者に対して「評定の下がった時期にどのような対応や支援等があったとしたら、評定が下がることはなかった、と思うか」という設問に対する自由記述回答は大きく二種類に分かれる。一つは、「給料、残業代のベースアップ」、「時間的勤務環境の改善」等の行政施策の実施、かつ、そのような改善の取組に係る情報が高校生に届くことである。もう一つは、「先生が、生徒の見えないところで何をしているのかを見せてくれたりすると、自分達の知らないことが見えてきて、もっと魅力を感じることができると思う。」という言葉に代表されるような教員の魅力、仕事内容等に関する情報発信である。高校生の中には、教員の仕事についてもっと知りたいという希望を持ちながら実現してこなかったケースが多くあるようで⁴⁾、今後様々な行事の立案・実施が期待される。

3 大学生調査

3.1 調査の概要

3.1.1 本学学生の進路状況

広島大学教育学部の学生のうち、教員免許の取得が卒業要件となっているのは初等教育教員養成コースと特別支援教育教員養成コースからなる第一類だけであり、初等教育教員養成コース卒業生の進路状況は教員になった者が81.2%（2022年、進学者、保育士を除く）と高い水準にある。しかしながら、全教育学部学生についてみると、図2のとおり教員になっている学生の割合は41.8%である。

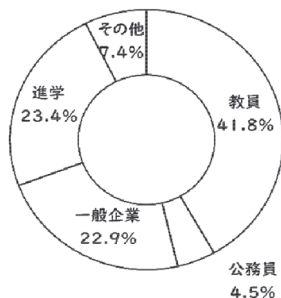


図2 卒業後の進路状況（教育学部）

3.1.2 教員志望の概要

私は、教育学部学生の教員志望者に対して指導・助言を行う役割を担っている。アドミッション部門の本務と併任して3年が経過した。近年、教員採用試験を受けようかどうしようか迷っていると相談に来る学生が増えているし、早い時期から躊躇している感がある。

学生のそうした逡巡が何によるものか、どのような時期にそう感じるのか、またどのような対応策が取られればそのような不安がいくらか緩和されるのか、調査・分析したいと思うところである。

また、全国的に教員競争倍率が低い状態が続いているし、教育行政施策として教員採用試験の早期化、複線化が検討されている。このことは教員養成の観点から見ると重要な案件であるが、本稿の直接の目的ではないので別の機会に述べる。

3.2 調査内容

調査の実施方法は、次のとおりである。

調査時期：2023年2月

調査対象校：広島大学教育学部

回答者の学年：4年生

回答者の学科等：教育学部第1～5類にまたがる13人

実施方法：教育学部生25人にメールで質問票、回答票を送り、13人から回答を得た（回収率：52%）。

調査内容は、前節の「高校生調査」と同様である。学校歴の中で節目となる各時期を示し、その時々々の教員志望の志望度合を5段階評定で評価してもらったのだが、節目の時期とは次のとおりである。

(1) 小学校6年生 小学校終了直前, (2) 中学校3年生 中学校終了直前, (3) 高校3年生9月 大学入試受験直前, (4) 大学1年生6月 大学入学後, (5) 大学2年生10月 教育実習以前, (6) 大学3年生10月 教育実習直後, (7) 大学4年生6月 教員採用試験直前, (8) 大学4年生1月 大学卒業直前。

その上で、教員志望の志望度合として定義した評定の内容等の調査内容は、高校生調査と同一である。

ただ、高校生調査と違う点として、次のことを断らなければならない。回答者全員が教育学部学生で教員採用試験の受験者であり、多くは試験合格者でもあり、何らかの形で私の指導を受けている者である。したがって、回答者の特性として、教員志望の度合いは極めて高いと思われる。加えて回答者の人数が高校生調査に比べると非常に少なかった（13人）。

3.3 調査結果

3.3.1 評定及び評定が変化した理由

図3のとおり、小学校、中学校、高校、大学の各時期の教員になりたいと思う強さ別の人数について、「強くなりたい」とする評定5の人数は、学校段階に従って漸次増加している。裏返しの関係で、「教員になりたいと強く思っていない」評定1の人数は、小学校の時最も多く（6人）、中学校で1人となり、高校以降は0人となる。

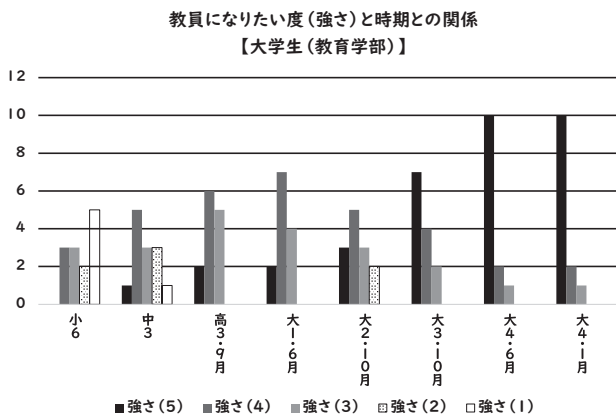


図3 【大学生】「教員になりたい度」のアンケート回答結果 (5段階評定)

次に、教員になりたい度合いの学校段階を追った変化を見てみると、基本は漸次上昇する形をとっている(13人中8人)。それ以外の者(5人)には、評定が下に変化するという時期が含まれている。また、該当する学生のほとんどが、評定が下に変化した後上方に回復している。その5人(A～E)の評定の変化の状況は次のとおりである。

- A 高校3年次 4→3, 大学1年次 3→4
- B 大学1年次 5→4, 大学2年次 4→2, 大学3年次 2→5
- C 大学3年次 4→3, 大学4年次 3→5
- D 大学2年次 5→4
- E 大学2年次 3→2, 大学3年次 2→4

そして、変化の理由についてそれぞれ次のように記述している。

- A 大学受験に当たって、いろんな選択肢に目を向けるようになったから。親にずっと教師を勧められてきたが、反抗したくなる時期があったから。
- B 教員の勤務環境等について、ブラックな風評が伝えられているため。教員として仕事をするうえで、学級経営など児童・生徒および保護者等との対応に不安を感じるため。

C 教育実習で、教師の仕事内容が想像以上に多く、人との関わりでめいってしまいそうだった。その後、そういうことができての教師であると納得したので。

D 地域の小学校でのボランティア活動を通して、自分に教員が務まるのか不安になったのと同時に、教師以外の立場でも子どもたちを支えられることを知ったから。

E 授業等を行う不安。しかし、教育実習の体験によって評定は上昇

3.4 調査結果の分析

3.4.1 教員志望の度合の低下の要因

大学生になると、児童生徒と直接触れ合う機会や教員の仕事を目の当たりにする場面が増えてくる(特に、本調査の対象者である教育学部学生の場合)。地域の小学校や放課後児童クラブでのボランティア活動、授業の一環としての学校実習、教育実習等である。そのような直接体験を通じて、教員の仕事への不安を感じたり目の前の教員の指導力等に圧倒され自身の力量の不足を自覚したりすることが主な要因と読み取れる。

ただ、大切なのはこのような教育実習やボランティア活動で児童生徒に直接触れ合うことこそが、教員志望の度合の上昇(回復)の重要なきっかけにもなっていることである。

3.4.2 教員志望の度合の低下への対応策

このことについて、学生の回答を列記すると次のとおりである。

- ・ブラックと言われる中でも、子育てなどプライベートとの両立を実現させている人のお話を聞ける機会があると、具体的なイメージが持ちやすいと思う。
- ・保護者対応はあまり授業で取り扱われることがないため、基礎的な対応方法や具体例を学ぶ機会があるといい。
- ・授業づくりについて学んだうえで、模擬授業だけでなく実際の子どもの前で授業をして、担任の先生や大学の先生から助言をもらう活動があればよい。また、授業がうまくいかない時に、相談に乗ってもらったり励ましてもらえる場があればよい。
- ・教員の仕事や学生に詳細に伝えていく機会があればよいと思う。教師の道をあきらめる人の中には、具体的にどんな仕事をしていて、どのような成果物があるのかを知らずに言っている人が多いように感じる。

一般に学生は、教育実習等の中で、一定程度は「実際の子どもの前で授業をして、担任の先生や大学の先生から助言をもらう活動」はあると思われるが、学生

の意見として、このような取組がもっと多くの機会に体験できれば対応策になると考えているのでは、と思量される。また、学生の回答の中にはたとえば、子育てなどプライベートとの両立、保護者対応、授業づくり、教員の仕事の詳細といったワードが見られるが、学生が教員を目指すに当たって、具体的に知りたいと感じている事に「直接的な手当てを施すような対応策」が求められているように思う。

4 考察

おそらく憧れの先生、理想とする教員に出会ったこと、あるいは人に教える喜びを知ったこと等を契機として教員志望の度合がピークを迎えるのは中学校段階である。高校になると、教員という仕事の現実にも触れ、社会的な教員の勤務環境の過酷さやその報道も目にするようになり、教員志望度合はひとまず冷却する。また、同時に進路学習等の成果として、教員以外の職業に魅力を感じたり、他の学問領域への関心が高まったりすることも多い。

しかし、ある程度の割合でやはり教員になりたいと思っている高校生は大学の教育学部等に進学し、教員になるための準備と鍛錬を続けることになる。大学では、教育実習や日頃の授業の中での演習、ボランティア活動等を通して、現実の教員の仕事に近い体験をすることとなり、自身の力量の不足や仕事の大変さを認識せざるをえない場面に何度も遭遇する。大学生の身の回りの教員に関する言説は相変わらず「教員だけの過酷さ」「教員ならではの大変さ」が強調されている。こうした日常の中で教員志望が減衰している様子が、今回の調査で浮かんできた。

一方で、こうした厳しい状況を乗り越え、高校生・大学生の教員への志望を回復させるものは情報と励ましであるということもアンケート調査から感じることである。

5 おわりに

今回のアンケート調査の高校生調査と大学生調査とは、せっかくの機会ではあったが二つの調査は結びつくようなものではなく、追跡調査等の繋がりにも至っていない。特に、大学生調査は量的にも質的にも不足していると感じている。この「質的にも不足」との意味は、この度の回答者全員が教育学部学生で教員採用試験の受験者・合格者であり、もともと教員志望の度合いの極めて高い者と見込まれるが、回答者としては、このような一貫した教員志望者だけでなく在学中に教員志望を取りやめた者なども含めた集団とすべきで

あったと考える。また、「2.2 調査内容」の「回答の評定が前の時期に比べて変化した主な理由」の設問に関して、「(1)」の選択肢で「ブラック」という、負の回答へと誘導する懸念のある非中立的な語を用いたことにより当該選択肢の選択数が高まったことが考えられる。これらの点の反省を踏まえ、調査項目・内容を再度検討し直し、あらためて高校生、大学生調査を実施するとともに、回答した高校生、大学生への面談調査を実施したいと考えている。

注

- 1) 報道は度々なされるが、直近の全国的な報道の一例は朝日新聞 2023 年 9 月 20 日付け朝刊（朝日新聞大阪本社）の記事である。
- 2) ただし、高校 1、2 年生の場合は、それぞれの学年として読み替える。
- 3) ただ、アンケートの問の構造が複雑になり、問の趣旨が理解しにくく回答に戸惑った者もいたかもしれない。
- 4) 高校生の自由記述の一例を挙げれば、「中学校 3 年次では、コロナ禍のため予定していた職業実習がなくなったため、一度経験する機会がほしい。」

参考文献

- 文部科学省（2022 年 9 月 9 日）。「令和 4 年度（令和 3 年度実施）公立学校教員採用選考試験の実施状況について」文部科学省
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/senkou/1416039_00006.html（2023 年 4 月 27 日）
- 文部科学省（2022 年 1 月 31 日）。「令和 3 年度（令和 2 年度実施）公立学校教員採用選考試験の実施方法について」文部科学省
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/senkou/1416039_00004.html（2023 年 4 月 27 日）